

2022(令和4)年の わが国周辺の漁海況の特徴について

目次

要約ー2022年のポイント	1
1. わが国周辺の海況	4
2. 主要魚介類の水揚量・市況動向	7
3. 魚種別の漁海況・市況	
(1)マイワシ・さば類・マアジ	11
(2)サンマ	12
(3)カツオ・ビンナガ	14
(4)スルメイカ・アカイカ	15
コラムー令和4年 浜だより	
JAFIC が見た今年の漁港とさかなたち	19

2022年12月

一般社団法人 漁業情報サービスセンター
(JAFIC)

要約－2022年のポイント

● 総括

- ・黒潮大蛇行が継続するなか、夏季の三陸・道東海域や日本海北部をはじめとして高めの水温が続いた。
- ・サンマ、スルメイカ、カツオをはじめとして主要魚介類の水揚量の減少傾向が続く一方、アキサケでは7年ぶりの好漁となった。特に、サンマとスルメイカの水揚量は過去最低であり、太平洋側を中心にマイワシやさば類の分布の北進、南下時期の遅れや成長の悪化が目立つなど、全体的には厳しい漁況が続いた1年となった。
- ・市況は、一時のコロナ禍の影響からはほぼ脱却したものの、輸入水産物価格の上昇や水揚量の減少を反映して全般的に高めで推移し、特にカツオやスルメイカで顕著であった。

● わが国周辺の海況

- ・日本近海の海面水温は、冬季は季節風や親潮系水の南下の影響で近年(2011～2020年平均)より低めの海域が多かったが、春季以降は低めの海域は縮小して北日本を中心に高めの海域が多くなった。
- ・2017年夏季から始まった黒潮大蛇行は本年も継続し、これまで最長であった1975年8月～1980年3月の大蛇行の持続期間を越えた。
- ・親潮の勢力は、冬季は平年(1993～2017年の平均)並まで拡大したが、春季以降は平年より弱めで推移した。
- ・黒潮続流は、今回の黒潮大蛇行が始まってから最も北上した。三陸沖～道東沖は黒潮続流北上部から黒潮系暖水が波及し、夏季～秋季は近年まれに見る高水温を記録して海洋熱波の状態になった。
- ・対馬暖流の勢力は、春季は平年より弱めの時期もあったが、おおむね平年より強めであった。流路は冬季～夏季は山陰を離岸して大和堆南沖付近を通過することが多く、流路に近い朝鮮半島沖や大和堆付近の海面水温はおおむね近年より高めであった。
- ・秋季は山陰西部沖で蛇行し、大和堆付近を通過する流路をとったため、大和堆付近の海面水温は高めで推移した。

● 主要魚介類の水揚量・市況動向

- ・全国主要117港における2021年12月～2022年11月の調査対象全魚種の累計水揚量は、前年同期比92%の180万3千トン、平均価格は前年同期比122%の238円/kgであった。
- ・魚種別の水揚量と平均価格の関係について、2020年12月～2021年11月と比較した。その結果、水揚量の増減にかかわらず価格を上げた魚種が多かった。産地市場で水揚量が低調だったことに加え、原油価格の高騰やロシアのウクライナ侵攻による水産物貿易の停滞、円安の進行による輸入水産物の価格高騰などの影響が示唆される。

● マイワシ

- ・マイワシの全国主要港における本年1～11月の累計水揚量は58.3万トン(太平洋側52.9万トン、日本海・東シナ海側5.3万トン)で、前年同期(55.6万トン)を2.7万トン上回った。
- ・三陸～犬吠埼海域のまき網による1～11月の累計水揚量は前年を上り、道東海域のまき網(7～10月)の水揚量は前年並みであった。
- ・日本海・東のまき網の主漁場は山陰海域で、1～11月の累計水揚量は前年を上回った。
- ・価格は6月までは前年並み、8～11月は2018年以降最高水準で推移した。

● さば類(マサバ、ゴマサバ)

- ・さば類の全国主要港における本年1～11月の累計水揚量は20.3万トン(太平洋側10.5万トン、日本海・東シナ海側9.9万トン)で、前年同期(30.6万トン)を大きく下回り、2018年以降で最も少なかった。
- ・太平洋側のまき網による水揚量は、1～3月が例年になく少なく、1～11月の累計水揚量は前年を下回った。
- ・日本海・東シナ海のまき網による1～11月のマサバの累計水揚量は、山陰海域と対馬海域では前年並み、九州西方海域と東シナ海南部海域では前年を下回った。まき網による1～11月のゴマサバの累計水揚量は東シナ海で前年を下回り、日本海での漁獲は例年どおり極めて少なかった。
- ・価格は6月まではやや高く、7月以降は近年並みで推移した。

● マアジ

- ・マアジの全国主要港における本年1～11月の累計水揚量は7.1万トン(太平洋側0.2万トン、日本海・東シナ海側6.9万トン)で、前年同期(6.4万トン)を上回り、近年並みであった。
- ・日本海・東シナ海のまき網の1～11月の累計水揚量は、山陰と対馬海域が前年を上回り、九州西方海域は前年並み、東シナ海南部海域では前年を下回った。
- ・価格は1～4月は低水準で推移していたが、5～9月は上向き、10月以降は近年並みとなった。

● サンマ

- ・今期の水揚量は、これまでの最低であった前年(1.8万トン)にわずかに及ばず過去最低を更新した。
- ・漁場は、前年と同様に公海を中心に形成されたが、漁場水温は高めであった。また、11月には道東沿岸や羅臼沿岸にも漁場が形成された。
- ・魚体は漁期を通じて、前年より小型で痩せており、平均価格も前年を下回る水準で推移した。

● カツオ

- ・竿釣りによる生鮮カツオの水揚量は累計2万5千トンで、前年を下回った(前年比61%)。
- ・4月までは奄美・沖縄周辺海域が主漁場となり、鹿児島港へ水揚げが集中し、房州勝浦港への水揚げがほとんどなかった。
- ・5月以降、脂の乗った特大魚が伊豆諸島周辺～房総周辺で竿釣り・まき網により漁獲され、千葉県(勝浦港・銚子港)に水揚げが集中した。
- ・魚体は年間を通して特大が主体だった
- ・夏以降は主漁場が常磐～東北はるか沖の東経150度以東となり、漁場が遠く入港回数は少なかった
- ・竿釣りによる生鮮カツオの全国月平均価格は、7～10月は前年より高値の470～563円/kgで推移した。それ以外の期間は近年並みであった。

● ビンナガ

- ・前年より早い4月に竿釣りによるビンナガ漁が始まり、5月は伊豆諸島東方海域でビンナガ中型魚主体となり平均漁獲量が一時増加したが、6月上旬で終漁した。
- ・全国の生鮮ビンナガの本年の水揚量は1万2千トンで、近年で最低水準となった。
- ・全国平均価格は、3月以降400円/kg以上の高値で推移した。

● スルメイカ

・全国主要港における生鮮スルメイカの水揚量は 11 月末現在 1.5 万トンで、過去 5 年平均の 6 割、前年並みであった。

価格は、水揚量の減少を反映し、9 月以降は過去 5 年で最高であった。

・北日本周辺の海面水温が近年(2011～2020 年平均)より高く、釣り・定置網・まき網が不振であったが、底曳網は比較的堅調であった。

・冷凍スルメイカの水揚量は 11 月末現在 3.9 千トンで、過去 5 年平均から半減し、前年を 4 割下回った。

・冷凍スルメイカ(中型いか釣り)の漁場は、6 月以降大和堆～隠岐諸島北で長期間漁場形成されたが、低調であった。また、前年 7～9 月に好漁が続いた大和堆北沖のロシア水域内での操業ができなかった。

・生鮮・冷凍含めた今年の漁獲量は、11 月末現在 1.9 万トンで、過去最低だった前年を更に下回った。

● アカイカ

・北太平洋の沖合域でのアカイカの操業は 11 月で終了し、本年の水揚量は 2.8 千トンで、前年の約 8 割であり、2017～2021 年に比べると約 5 割であった。

・水揚量が減ったことで本年の平均価格は対前年比約 2 倍の 970 円/kg となった。

・水揚量が減少した主な原因は、全ての中型イカ釣り船が 5～8 月の夏漁を 7 月に 1 航海のみで切揚げて日本海のスルメイカ漁に向かったためである。

1. わが国周辺の海況

(1) 海域別海況概要

日本近海の海面水温(図 1)は、冬季は季節風や親潮系水の南下の影響で、近年(2011~2020 年平均)より低めの海域が広がったが、春季以降は低めの海域は縮小し、北部太平洋沖合を中心に高めの海域が広がった。

1) 黒潮域・東シナ海

2017 年 8 月からの始まった黒潮大蛇行は、観測史上最長といわれた 1975 年 8 月~1980 年 3 月までの継続期間を超え 12 月現在も継続している。

黒潮の流路(図 1)は、2 月上旬に大蛇行最南下部の流軸から切り離された冷水渦が 5 月上旬に屋久島南東沖で再結合する等の一時的な変動はあったが、黒潮流軸は四国沖で離岸し、春~夏季を中心に遠州灘~熊野灘(図 1-A)沖で屈曲して接岸することが多かった。

本年の海面水温は、四国沖は黒潮流軸離岸の影響で近年より低め、遠州灘~熊野灘沖は黒潮流軸の接岸や暖水波及の影響で高め基調で推移し、5 月下旬には熊野灘沿岸に黒潮流軸が接岸して著しく高めになった。関東南沖の黒潮外側域の海面水温は、前線や低気圧、台風の影響で近年より低めで推移した。小笠原周辺や南鳥島周辺の南方沖の海面水温は、春季以降は気象の影響で高めで推移した。

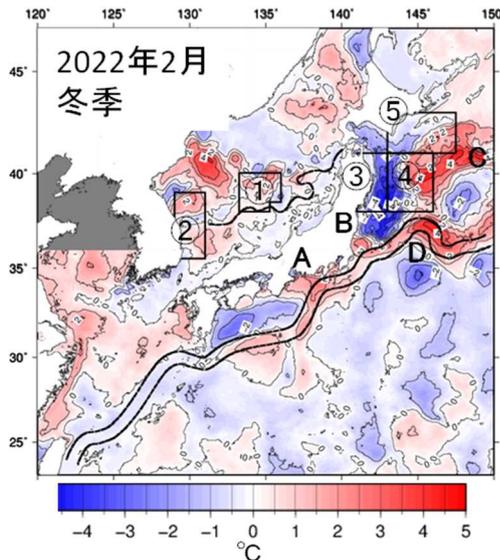


図 1-1. 2022 年 2 月の海面水温の近年差と中旬の黒潮流路(黒色実線、以下同様)

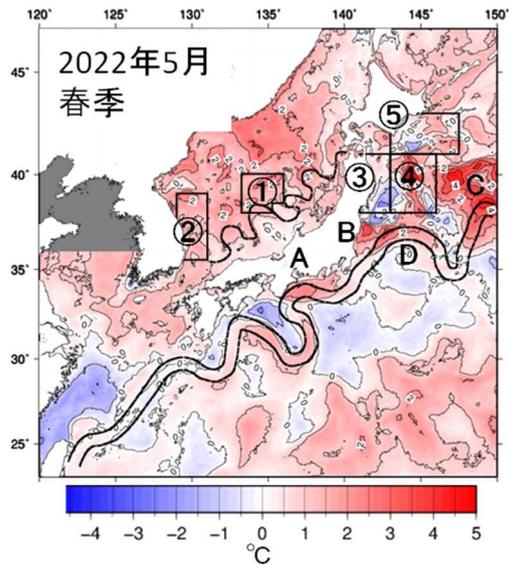


図 1-2. 2022 年 5 月の海面水温の近年差

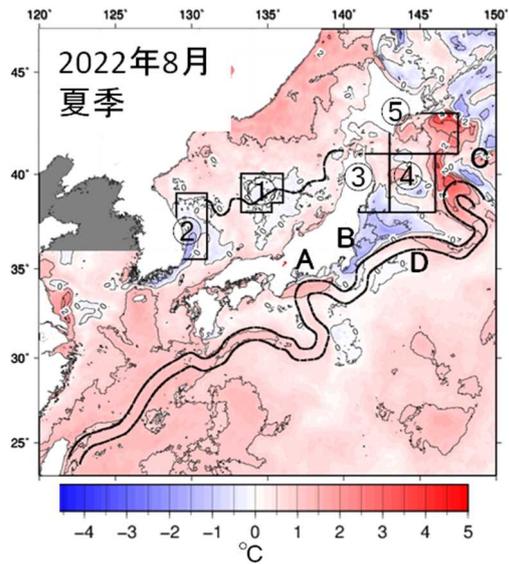


図 1-3. 2022 年 8 月の海面水温の近年差

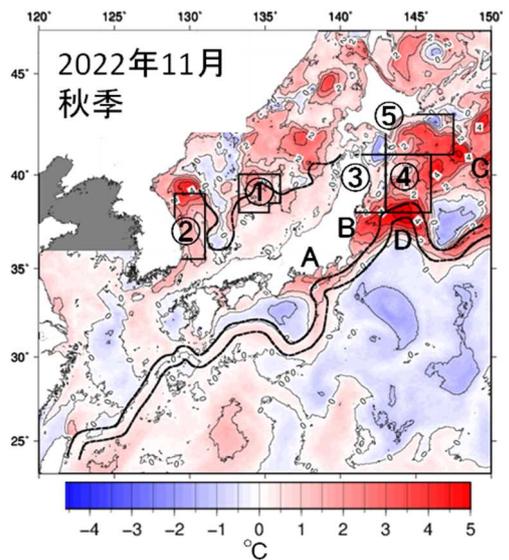


図 1-4. 2022 年 11 月の海面水温の近年差

東シナ海の海面水温は、気象の影響による変動が大きかった。黄海周辺と東シナ海北部では期間を通して近年より高めで推移した。一方、東シナ海南部では冬～春季は寒気等の影響で低めとなるが多かったが、梅雨明け後は日射等の気象の影響で近年より高めの海域が拡大した。

2) 親潮域・混合水域

親潮の面積(100m深で5°C以下)は、前年の秋季から拡大傾向で、冬季はおおむね平年(1993～2017年の平均)並であった。しかし春季以降は縮小し、夏～秋季はかなり小さめで推移した。

黒潮続流の流路は、冬季は常磐以北で離岸し、春季は接岸する事が多かった。夏季は再び離岸し、秋季は接岸するとともに沿岸寄りの最北上部(図1-D)が北偏した。三陸沖合の145°E以東の海域(図1-C)では春季以降、流軸は大きく蛇行して北上し、夏～秋季には流軸から暖水渦が切り離される現象もみられた。

三陸沿岸海域(図1-③)～常磐沿岸(図1-B)の海面水温は、冬季は黒潮続流の離岸と親潮面積の拡大のため近年より低めで推移し、2月は4～5°C低めの海域もみられた。春季は黒潮続流の接岸と親潮面積の縮小により低めの海域は縮小したが、夏季は黒潮続流の離岸や台風等の気象の影響で低めの海域が再拡大した。秋季は黒潮続流の接岸と北上により低めの海域は再び縮小した。三陸沖合海域(図1-④)や道東海域(図1-⑤)の海面水温は、黒潮続流の沿岸寄りの最北上部や三陸はるか沖の北上部(図1-C)からの暖水波及により年間を通し、おおむね近年より高めで推移し、道東海域は7月中旬に近年偏差+3°C、三陸沖海域は11月下旬に+3.3°Cと近年まれにみる高水温を記録した(図2)。

3) 日本海

対馬暖流の勢力は、冬季は平年より強めであったが、春季に弱まり、夏季には再び強まり、秋季は近年よりかなり強めになった。対馬暖流の流路は、冬～夏季は山陰～北陸でおおむね離岸し、大和堆南沖付近を通過したが、秋季は山陰西部で蛇行して浜田沖付近まで南下し大和堆付近を通過した。

海面水温は、大和堆海域(図1-①)は気象の影響

で近年より低めの期間もあったが、おおむね高めで推移し、秋季は対馬暖流通過の影響で高めの傾向が強まった。東朝鮮暖流でも、台風の影響があった夏季を除き高めで推移した(図2)。本州沿岸では、冬季は季節風の影響で弱い低めであったが、春季以降は海面水温はおおむね高めであったが、山陰西部は対馬暖流が蛇行した影響で冷水が波及し秋季はやや低めであった。

日本海北部の海面水温は、冬季には季節風等気象の影響で沿海州付近を中心に、近年より低めの海域が広がったが、春季以降は日射等気象の影響で上昇し広範囲で2°C前後高めの状態が続いた。

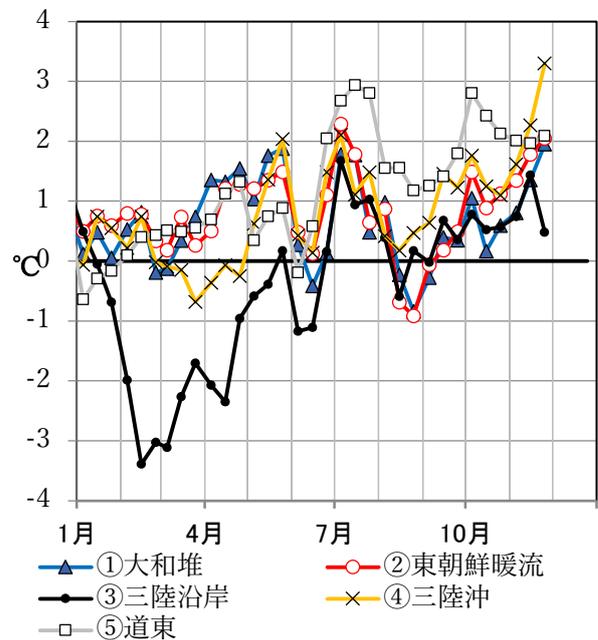


図2. 2022年における海域毎の海面水温の近年差(各海域の範囲は図1-①～⑤参照)

(2) 親潮・混合水域の高水温(海洋熱波)

道東海域では夏季以降、近年より高めの状態が続き、7月と10月に近年より約3°C高めと極めて高めの状態であった(図2)。三陸沖海域は7月に近年より約2°C高めを記録した後は台風等の影響で近年並まで下がったが、秋季は徐々に近年偏差が拡大し、11月下旬に最高となった(図2)、両海域共に夏季以降はいわゆる海洋熱波の状態であった。

この原因として、三陸沖～道東海域の高水温については、気象庁の「NEAR-GOOS 地域リアルタイムデータベースのTESAC報」等の観測データから黒潮

続流から高温高塩分の黒潮系水がこれらの海域に波及したことが示されている。特に 7 月は黒潮系水が 42° 30′ N 付近まで達していたことから、気温が高く日射も多かったこととの相乗効果と考えられる。以下に、黒潮続流の流路変動を示した。

冬季では、黒潮続流の沿岸寄りの最北上部(図 3-D)が金華山沖の 145° E 付近であったが、春～夏季にかけて徐々に南西方向に移動した(図 3-2～3)。しかし、三陸はるか沖の黒潮続流の北上部(図 3-C)は春～夏季に北上した。また、沿岸と三陸はるか沖の北上部から三陸沖～道東海域に暖水が波及した。

秋季には黒潮続流の流路は接岸し、沿岸の最北上部は 11 月としては近年最北を記録した。さらに、常磐沖を小蛇行が北上したため、沿岸寄りの最北上部付近の流軸に屈曲を生じ、三陸沖海域に暖水が波及しやすい状態となった。そのため、11 月下旬の三陸沖海域の海面水温偏差が近年最高を記録したと考えられる。

12 月は黒潮続流の沿岸寄りの最北上部(図 3-D)は一時的に離岸したが、再び接岸し、依然として 38° N 付近まで達している。今後も三陸沖～道東海域に暖水が波及しやすい状態が続くと思われる。

(海洋事業部 矢野泰隆)

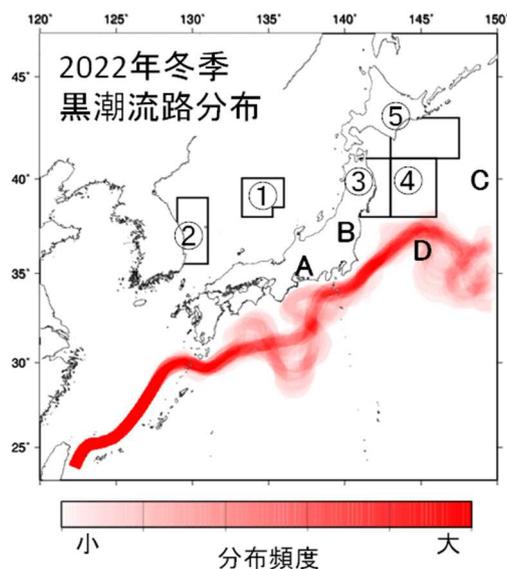


図 3-1. 2022 年冬季の黒潮と黒潮続流の流路分布 (海上保安庁海洋情報部の海流 GIS 情報より作成、以下同様)

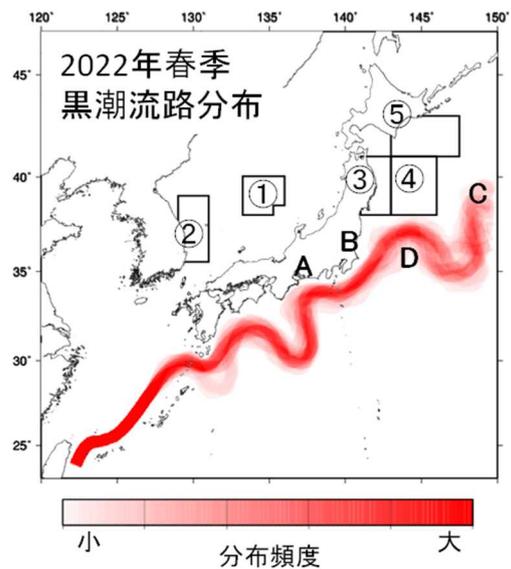


図 3-2. 2022 年春季の黒潮と黒潮続流の流路分布

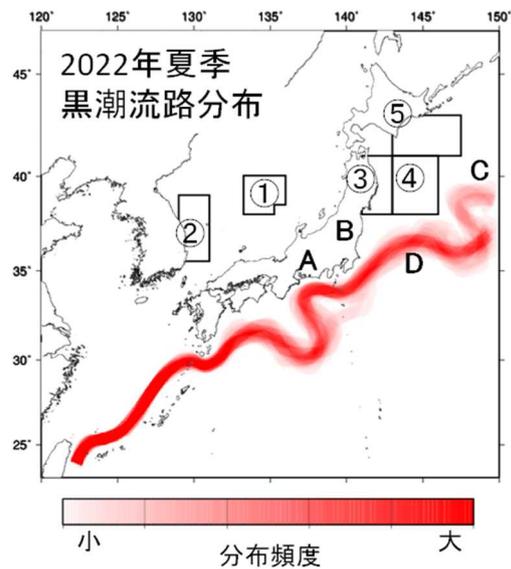


図 3-3. 2022 年夏季の黒潮と黒潮続流の流路分布

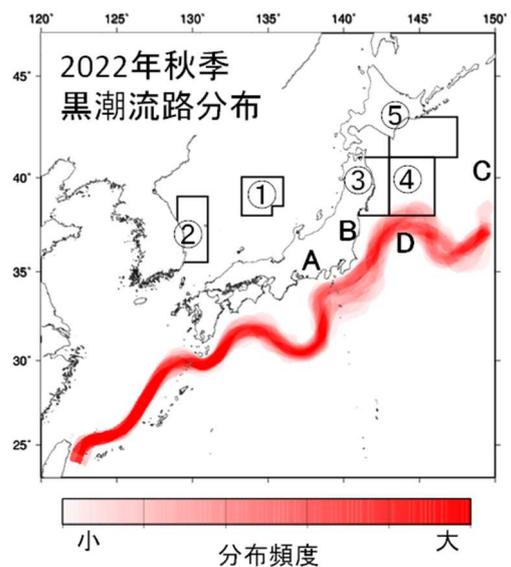


図 3-4. 2022 年秋季の黒潮と黒潮続流の流路分布

2. 主要魚介類の水揚量・市況動向

(1) 主要港における主要魚種の動向

JAFIC が調査している全国主要 117 港における 2022 年(注)の調査対象全魚種の累計水揚量は 180 万 3 千トンで、2021 年(196 万 7 千トン)の 92% と 2017 年以降で最低となった(表 1)。平均価格は 238 円/kg で、2021 年(195 円/kg)の 122% と 2017 年以降で最高価格であった。なお、本報告の水揚量と価格は JAFIC「おさかなひろば」により、2022 年 11 月は速報値である。また、水揚量・価格ともに「前年同期並み」とあるのは増減率 0~5% の場合を示す。

(注)20XX 年とあるのは前年 12 月から当該年 11 月までの期間を示したものである。

表 1. JAFIC 調査港の 2022 年の月別水揚量(トン)と平均価格(円/kg)および前年同期との比較

月	2022年		2021年		前年対比	
	水揚量	価格	水揚量	価格	水揚量	価格
12	141,545.0	244	163,489.9	219	87%	111%
1	119,969.9	207	121,622.4	185	99%	112%
2	122,075.0	202	146,784.6	162	83%	125%
3	164,563.7	164	181,144.6	147	91%	112%
4	152,624.0	179	138,036.5	168	111%	107%
5	178,639.0	188	174,851.1	150	102%	125%
6	148,249.1	233	195,412.9	166	76%	140%
7	191,762.3	200	193,571.2	160	99%	125%
8	99,372.0	269	95,088.3	238	105%	113%
9	178,045.9	348	214,940.4	262	83%	133%
10	222,092.8	303	217,295.5	226	102%	134%
11	84,771.3	338	124,975.9	279	68%	121%
合計	1,803,710.0	238	1,967,213.4	195	92%	122%

(2) 主要 49 魚種の水揚量と平均価格

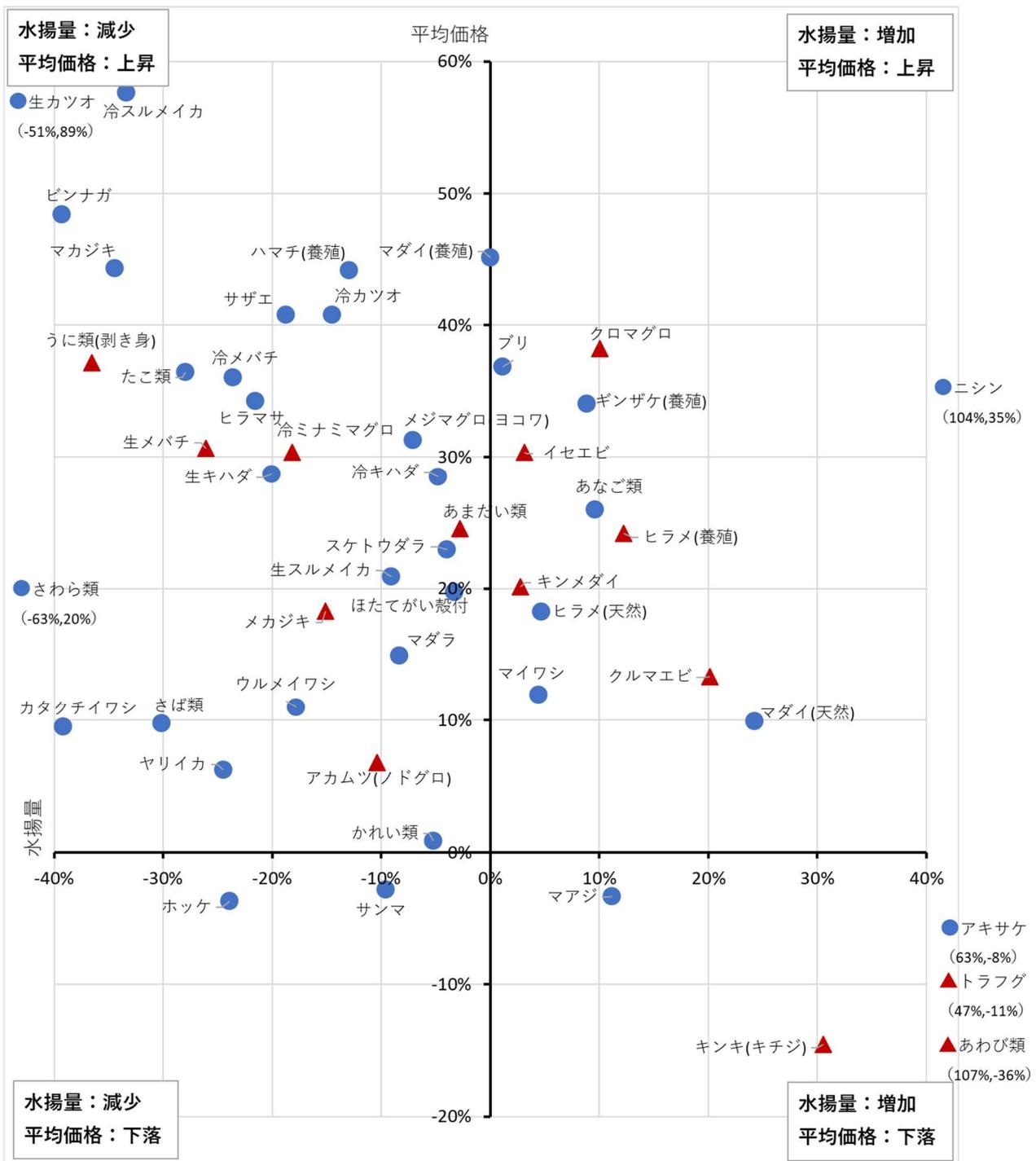
主要 49 魚種の 2022 年の魚種別の累計水揚量と平均価格を前年同期と比較した(表 2、図 4)

水揚量は、ニシン、マアジ、ギンザケ(養殖)など 12 魚種が前年同期を上回り、マイワシ、スケトウダラ、ブリなど 11 魚種は前年同期並み、カタクチイワシ、さば類、ビンナガ、冷凍メバチなど 26 魚種は前年同期を下回った。平均価格は、生鮮カツオ、冷凍キハダ、マダイ(養殖)、生鮮スルメイカなど

41 魚種が前年同期を上回り、ホッケ、サンマなど 4 魚種は前年同期並み、アキサケ、キンキ(キチジ)など 4 魚種は前年同期を下回った。

表 2. 全国主要港の 2022 年の魚種別水揚量(トン)と平均価格(円/kg)および前年同期との比較。(2021 年の平均価格の昇順に並べ、1,000 円/kg 以上の魚種を赤字で示した。)

	2022年		2021年		前年比	
	水揚量	価格	水揚量	価格	水揚量	価格
カタクチイワシ	8,230.1	43	13,523.6	39	61%	110%
マイワシ	590,681.5	45	565,637.3	40	104%	112%
スケトウダラ	108,920.3	58	113,381.2	47	96%	123%
ウルメイワシ	37,433.3	62	45,531.9	56	82%	111%
ホッケ	16,770.2	64	22,036.9	66	76%	96%
ニシン	5,339.3	105	2,613.6	77	204%	135%
さば類	260,894.2	121	373,547.6	110	70%	110%
ほたてがい殻付	55,376.0	212	57,249.0	177	97%	120%
冷カツオ	150,412.3	257	175,875.9	183	86%	141%
ブリ	42,530.8	251	42,041.9	184	101%	137%
マダラ	31,285.5	230	34,121.6	200	92%	115%
マアジ	76,922.3	206	69,180.2	213	111%	97%
生カツオ	32,217.5	407	65,596.2	216	49%	189%
かれい類	10,345.3	281	10,916.9	278	95%	101%
冷キハダ	37,995.5	447	39,891.6	348	95%	128%
ビンナガ	13,295.3	521	21,894.1	351	61%	148%
マダイ(天然)	4,533.4	512	3,648.2	466	124%	110%
ヒラメ	1,007.2	642	1,283.3	479	78%	134%
マカジキ	480.8	717	733.4	497	66%	144%
サンマ	17,458.3	568	19,300.9	584	90%	97%
マダイ(養殖)	432.3	861	432.2	593	100%	145%
ギンザケ(養殖)	11,608.0	816	10,661.5	609	109%	134%
さわら類	1,167.7	746	3,122.0	621	37%	120%
生スルメイカ	15,258.3	757	16,778.1	626	91%	121%
たこ類	4,507.4	881	6,256.3	646	72%	136%
冷スルメイカ	4,671.4	1,036	7,013.4	657	67%	158%
サザエ	308.5	935	379.5	664	81%	141%
ヤリイカ	2,634.4	719	3,486.9	676	76%	106%
生キハダ	8,752.1	959	10,941.9	745	80%	129%
ハマチ(養殖)	154.4	1,085	177.3	752	87%	144%
ヒラメ(天然)	1,558.5	923	1,488.4	781	105%	118%
あなご類	647.0	1,004	590.2	797	110%	126%
冷メバチ	16,381.9	1,106	21,442.2	813	76%	136%
アキサケ	78,697.4	782	48,417.2	851	163%	92%
メジマグロ(ヨコワ)	435.1	1,135	468.1	865	93%	131%
生メバチ	4,345.2	1,329	5,877.9	1,018	74%	131%
メカジキ	2,430.7	1,268	2,862.7	1,071	85%	118%
ヒラメ(養殖)	35.2	1,656	31.4	1,333	112%	124%
キンメダイ	1,827.7	1,672	1,778.5	1,392	103%	120%
アカムツ(ノドグロ)	350.3	1,593	390.8	1,492	90%	107%
あまだい類	209.5	2,253	215.4	1,810	97%	125%
冷ミナミマグロ	4,286.2	2,397	5,238.0	1,839	82%	130%
クロマグロ	3,816.4	2,565	3,468.8	1,855	110%	138%
キンキ(キチジ)	784.8	2,225	601.3	2,604	131%	85%
イセエビ	109.6	5,860	106.3	4,496	103%	130%
トラフグ	155.1	4,023	105.8	4,520	147%	89%
クルマエビ	16.7	5,940	13.9	5,240	120%	113%
あわび類	65.8	4,782	31.8	7,435	207%	64%
うに類(剥き身)	62.7	14,765	98.9	10,766	63%	137%



省)によると、2人以上世帯の1世帯当たりの生鮮魚介類の購入数量は、2022年1～10月の累計で前年同期の85%と下回ったが、平均価格は前年同期の111%と上回った。このことは、水産物の価格高を反映したものと考えられる。

(4)産地市場における代表魚種の月別動向

産地市場において水揚量の多いマイワシ、主産地の北海道で好漁だったアキサケおよび養殖魚の代表としてマダイについて動向を検討した。

1)マイワシ

2022年の累計水揚量は59万トンで前年(56万5千トン)の104%であった。平均価格は45円/kgで前年(40円/kg)の112%であった。水揚量は前年をやや上回ったものの、価格は年間を通じて前年並み～上回って推移した(図5)。また、貿易統計(財務省)によると、2022年1～10月の冷凍マイワシの輸出量は12万7千トンで前年同期の157%、金額は109億7千万円で前年同期の168%で、数量・金額ともに前年同期を上回り好調であった。

2)アキサケ

主産地である北海道の今漁期(9～11月)の累計水揚量は7万8千トンで、前年同期の165%、2017～2020年同期の130～170%と近年では好調であった。価格は、漁期序盤の9月は前年および過去5年平均を上回ったものの、10、11月は下回って推移した(図6)。

3)マダイ(養殖)

2022年の累計水揚量は432トンで前年並みで、3、10～11月を除き前年同月を下回った。平均価格は861円/kgで、前年の145%であった。年間を通じて前年を上回り、4月以降は過去5年平均を上回って推移した(図7)。

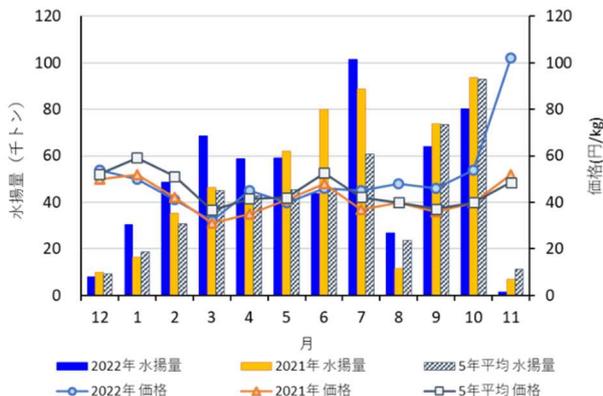


図5. マイワシの水揚量と価格の推移

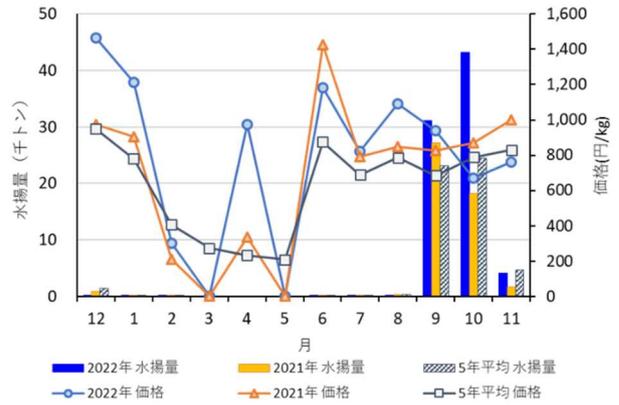


図6. アキサケの水揚量と価格の推移

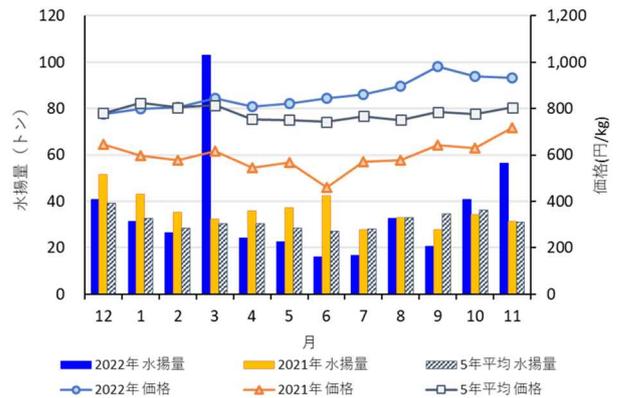


図7. マダイ(養殖)の水揚量と価格の推移

(5)東京都中央卸売市場における動向

東京都中央卸売市場の水産物の取扱数量と平均価格を表3に示した。2022年(2021年12月～2022年10月)の累計取扱数量は30万1千トンで、前年同期(31万7千トン)の95%であった。平均価格は1,321円/kgで前年同期(1,104円/kg)の120%で、2017年以降で最高価格となった。月別に見ると、年間を通じて前年および過去5年平均を上回る価格で推移した。

表3. 東京都中央卸売市場の2022年の月別取扱数量(トン)と平均価格(円/kg)および前年同期との比較

月	2022年		2021年		前年対比	
	数量	価格	数量	価格	数量	価格
12	34,425.8	1,534	34,988.9	1,342	98%	114%
1	24,707.7	1,191	25,242.6	1,013	98%	118%
2	24,159.3	1,166	25,977.7	1,030	93%	113%
3	28,486.0	1,171	30,932.0	1,038	92%	113%
4	31,207.4	1,207	31,787.7	1,038	98%	116%
5	28,265.7	1,239	27,850.0	1,027	101%	121%
6	28,200.2	1,296	28,661.5	1,033	98%	125%
7	25,860.3	1,378	28,065.4	1,142	92%	121%
8	23,657.7	1,409	25,534.2	1,129	93%	125%
9	24,869.0	1,459	27,843.5	1,119	89%	130%
10	27,372.7	1,453	30,711.4	1,175	89%	124%
合計	301,211.8	1,321	317,594.9	1,104	95%	120%

(出典:東京都中央卸売市場 市場統計情報)

次に、一般鮮魚・冷凍魚・輸入物の取扱いが多い魚種の代表として生鮮カツオ、冷凍メバチ、塩ギンザケについて東京都中央卸売市場における動向を検討した。なお、2022年11月は豊洲市場の速報値である。

1) 生鮮カツオ

2022年の累計取扱数量は6千100トンで前年(8千トン)の76%、平均価格は733円/kgで前年の160%であった。特に夏以降は産地の水揚量が低調だったことから、数量は前年を下回って推移し、価格は1月を除いて前年を上回った(図8)。

2) 冷凍メバチ

2022年の累計取扱数量は1万1千トンで前年(1万2千トン)の93%、平均価格は1,367円/kgで前年の123%であった。価格は年間を通じて前年および過去5年平均を上回り、高値を維持した(図9)。円安や燃油価格の高騰などが影響したものとみられる。

3) 塩ギンザケ

2022年の累計取扱数量は4千500トンで前年(4千トン)の112%、平均価格は1,128円/kgで前年(871円/kg)の130%であった。価格は2月以降強含みで推移し、年間を通じて前年を上回った(図10)。ロシアのウクライナ侵攻によりノルウェー産アトランティックサーモンの価格が上昇する中、塩ギンザケの主体であるチリ産養殖ギンザケの需要が高まったことや円安などが影響したものとみられる。

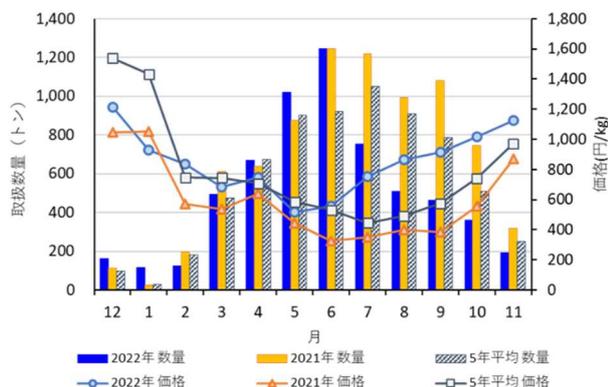


図8. 生鮮カツオの取扱数量と価格の推移

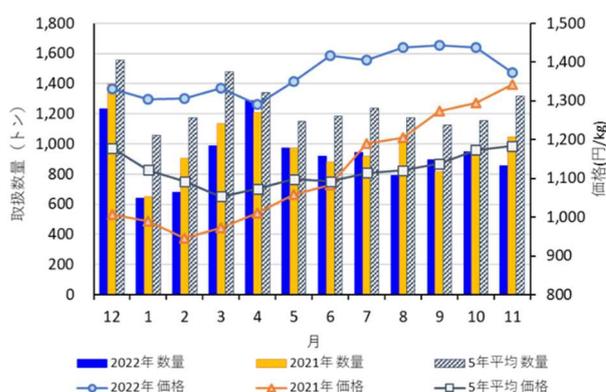


図9. 冷凍メバチの取扱数量と価格の推移

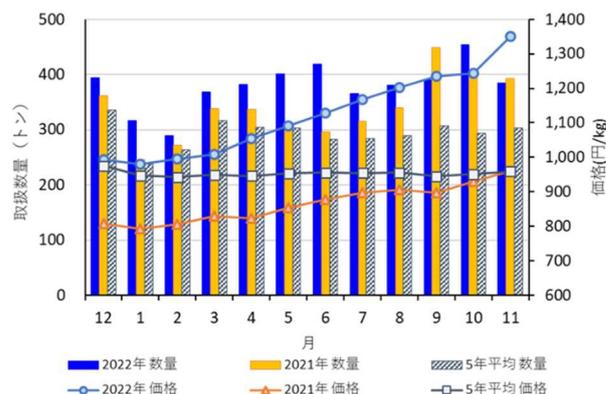


図10. 塩ギンザケの取扱数量と価格の推移

(6) まとめ

2022年は、産地市場では年間を通じて2021年を上回る価格で推移した。魚種別に見ても、全般的に高値基調で、平均価格が2021年を上回った魚種が多かった。水揚量が2017年以降で最低水準だったことに加え、燃油価格の高騰やロシアのウクライナ侵攻による水産物貿易の停滞、円安による輸入水産物の価格の高騰などが影響したものとみられる。

また、東京都中央卸売市場では、年間を通じて数量は前年同月並み～やや下回って推移し、価格は前年同月および過去5年平均を上回って推移した。魚種別に見ると、生鮮カツオは不漁により平均価格が変動した。輸入物の取扱数量が多い冷凍メバチや塩ギンザケは高値を維持し、燃油価格の高騰や円安の進行などが影響したものとみられる。

一方で、家計調査(総務省)によると、2人以上1世帯当たりの一般外食への支出金額は、2022年1~10月の累計で前年同期の123%であった。2020年および2021年は、コロナ禍で巣ごもり需要により生鮮魚介類の購入数量が増加する一方、

一般外食が大きく落ち込んだが、今期はコロナ禍前の2019年をやや下回る水準まで戻った(2020年1~10月:2019年比63%、2021年1~10月:同66%、2022年1~10月累計:同81%)。2022年はコロナ禍が続いたものの行動制限が徐々に緩和されたことから、巣ごもり需要が終わりつつあることが示唆される。

以上のように、魚価高騰と内食需要の減少が継続すると、消費者の「魚離れ」が懸念される。

(水産情報部 石山なな子)

3. 魚種別の漁海況・市況

(1) マイワシ・さば類・マアジ

1) マイワシ

マイワシの全国主要港における本年1~11月の累計水揚量は58.3万トン(太平洋側52.9万トン、日本海・東シナ海側5.3万トン)で、前年同期(55.6万トン)を2.7万トン上回った(図9)。

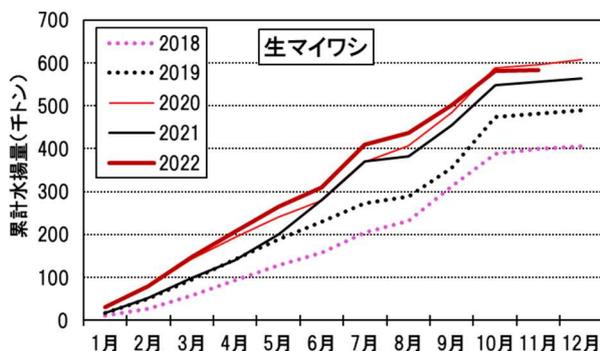


図9. 2018~2022年の全国主要港における生鮮マイワシの月別水揚量の推移

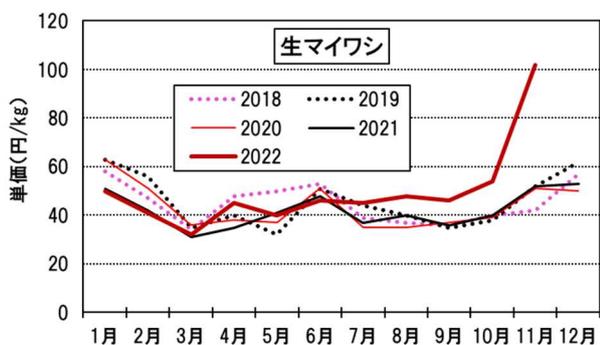


図10. 2018~2022年の全国主要港における生鮮マイワシの月別単価の推移

太平洋側の北部まき網(三陸~犬吠埼海域)の主漁期は1~7月で、1~4月は前年を上回り、5月以降は前年並みであり、1~11月の累計水揚量は前年を上った。道東海域のまき網(6~10月)の水揚量は前年並みであった。

日本海・東シナ海側のまき網の主漁場は山陰海域であった。山陰海域の主漁期は3~7月で、1~11月の累計水揚量は前年を上回った。価格は6月までは前年並みで、8~11月は2018年以降最高水準で推移した(図10)。

2) さば類(マサバ、ゴマサバ)

さば類の全国主要港における本年1~11月の累計水揚量は20.3万トン(太平洋側10.5万トン、日本海・東シナ海側9.9万トン)で、前年同期(30.6万トン)を大きく下回り、2018年以降で最も少なかった(図11)。

太平洋側の北部まき網(三陸~犬吠埼海域)の主漁期は11月~翌年3月で、本年は1~3月の水揚量が例年になく少なく、1~11月の累計水揚量は前年を下回った。また、夏秋季の道東まき網や八戸沖でもほとんど漁場が形成されなかった。

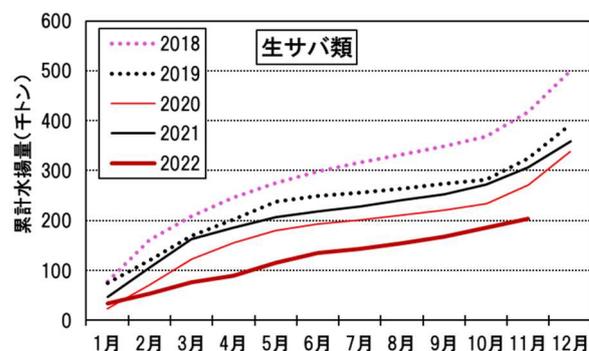


図11. 2018~2022年の全国主要港における生鮮さば類の月別水揚量の推移

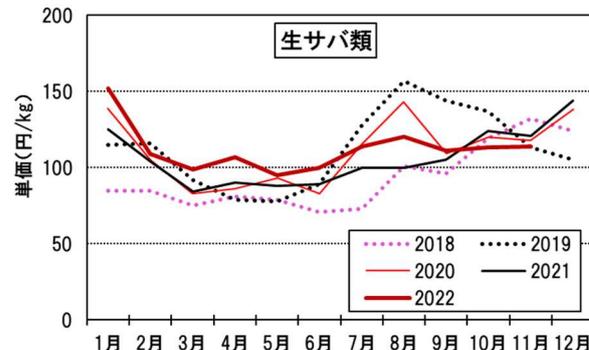


図12. 2018~2022年の全国主要港における生鮮さば類の月別単価の推移

日本海・東シナ海側のまき網漁場は、1～3月に対馬海域主体、1～6月に山陰海域主体(例年とは異なり4～5月に好漁であった)、10～11月に九州西方海域主体に形成された。1～11月のまき網によるマサバの海域別累計水揚量は、日本海と対馬海域では前年並み、九州西方海域と東シナ海南部海域では前年を下回った。1～11月のまき網によるゴマサバの累計水揚量は東シナ海の全海域で前年を下回った。なお、日本海でのゴマサバの水揚量は例年どおり極めて少なかった。価格は6月まではやや高く、7月以降は近年並みで推移した(図12)。

3) マアジ

マアジの全国主要港における本年1～11月の累計水揚量は7.1万トン(太平洋側0.2万トン、日本海側6.9万トン)で、前年同期(6.4万トン)を上回ったが、近年並みであった(図13)。

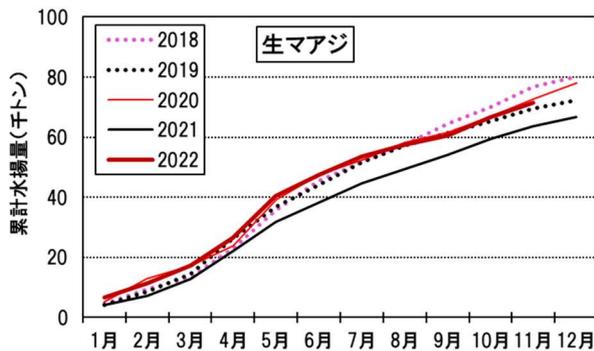


図13. 2018～2022年の全国主要港における生鮮マアジの月別水揚量の推移

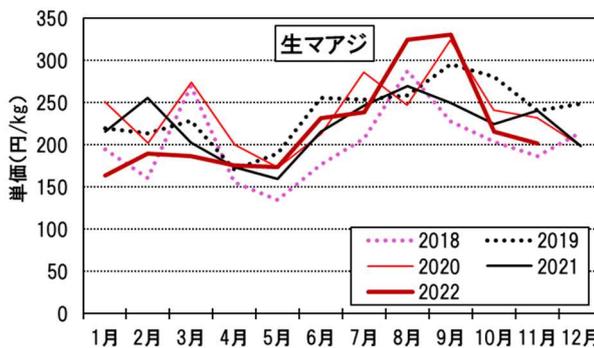


図14. 2018～2022年の全国主要港における生鮮マアジの月別単価の推移

日本海のまき網漁場は山陰海域にほぼ周年にわたり形成され、1～11月の累計水揚量は前年を上回った。東シナ海のまき網漁場は、1～5月は対

馬海域、3～4月と7～10月は九州西方海域、5～6月は東シナ海中南部海域に形成された。まき網による1～11月の累計水揚量は、山陰と対馬海域が前年を上回り、九州西方海域は前年並み、東シナ海南部海域では前年を下回った。価格は1～4月は低水準で推移していたが、5～9月は上向き、10月以降は近年並みとなった(図14)。

(水産情報部 谷津明彦)

(2) サンマ

2022年の水揚量は、9月までは前年を下回って推移し、10月は前年を上回ったものの、11月以降は前年を下回った(図15)。平均単価は前年を下回って推移した(図16)。累積水揚量は過去最低となり、累積水揚金額は前年を下回った。

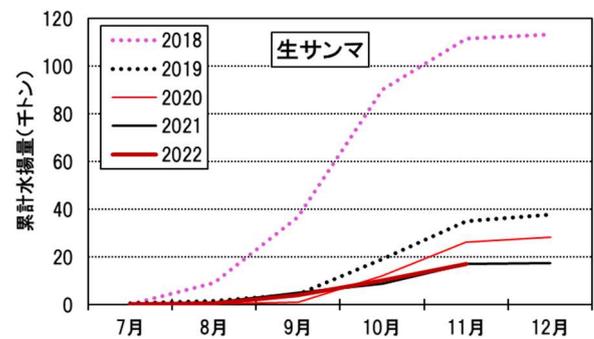


図15. 生鮮サンマ 2018～2022年累計水揚量の推移

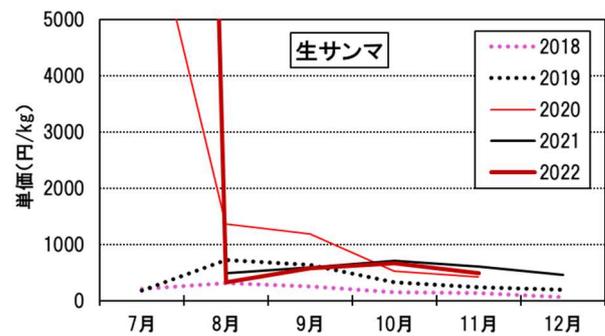


図16. 生鮮サンマの2018～2022年の月別単価の推移

2022年の漁況の経過は以下のとおりである(漁場は図17、漁獲物の組成は図18参照)。2022年はロシア主張200海里内での操業を行えない状況であったことから、8月1日の10トン未満船解禁時にはサンマ狙いの出漁は無く、8月11日の10トン以上20トン未満船解禁時に1隻が出漁し、8月15日の20トン以上100トン未満船が解禁時に10隻程度が出

漁した。ともに、花咲港東南東沖の公海で操業した。

今年 8 月の主漁場は、花咲港東南東沖 500～510 海里、620～680 海里、730～850 海里的 3カ所で、漁場水温は 19～22℃と高かった。前年よりも漁場は東側であり、漁場水温は前年よりも高かった。漁場が遠いため、小型船の多くは出漁できなかった。漁獲物は体長 25～28cm、体重 60～80g 台が主体であり、前年と比べると今年は体長が短く、特に体長 28～30cm 台に注目すると、今年は前年よりも体重が 20～30g 程度軽く痩せていた

9 月の主漁場は、上旬が花咲港東南東～東北東沖 390～710 海里、中旬が花咲港東北東沖 460～600 海里、下旬が花咲港東北東～東沖 380～630 海里であった。前年同期よりも漁場はやや北西側であった。漁獲物は体長 28～29cm、体重 90～110g 台が主体であり、前年と比べると今年は体長の主体が 1cm 短く、体重の主体が 10g 程度少なく痩せていた。

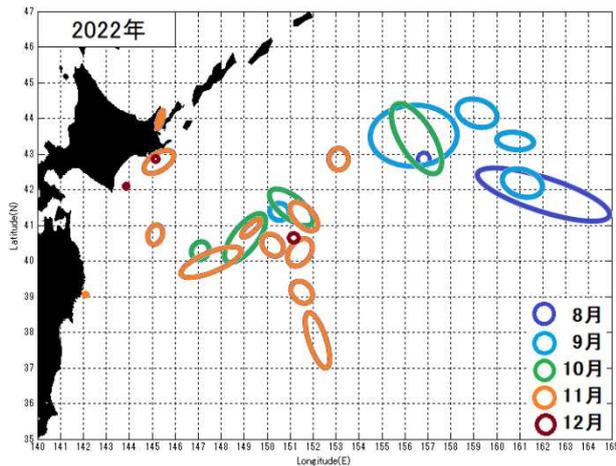


図 17. 2022 年月別サンマ主漁場

10 月の主漁場は、上旬～中旬が前年同様に公海であり、花咲港南東沖 210～230 海里、花咲港東南東沖 230～300 海里、花咲港東～東北東沖 400～530 海里であった。下旬になると主漁場は花咲港南南東～南東沖の 180～230 海里、花咲港東南東沖の 290～310 海里となり、一部わが国の EEZ にも漁場が形成された。漁獲物は 9 月同様、体長 28～29cm、体重 90～110g 主体であった。

11 月上旬の主漁場は、前年同期よりも沿岸に近く、道東沿岸の霧多布南沖 15 海里～厚岸南沖 10 海里、オホーツク海羅臼沿岸、花咲港南南東～南東沖の 170～230 海里、花咲港東南東沖 310～330 海里であった。11 月中旬の主漁場は、道東沿岸の花咲港

南沖 20 海里～釧路南沖 20 海里、オホーツク海の羅臼沿岸、花咲港南東沖 300 海里、宮古東沖 210 海里、金華山東沖 480 海里～東南東沖 500 海里であり、漁場が南へ広がった。11 月下旬は、時化のために公海には出漁できず、主漁場は花咲港南沖 15 海里～厚岸南沖 10 海里、オホーツク海の羅臼沿岸、気仙沼東沖 15 海里で、前年同期とは異なりわが国の沿岸のみであった。前年は 10 月よりも 11 月の漁獲物が太っていたが、2022 年 11 月の漁獲物は 10 月よりも小さくなり、体長 29cm、体重 60～110g 主体で痩せており、0 歳魚の混じりが多くなった。

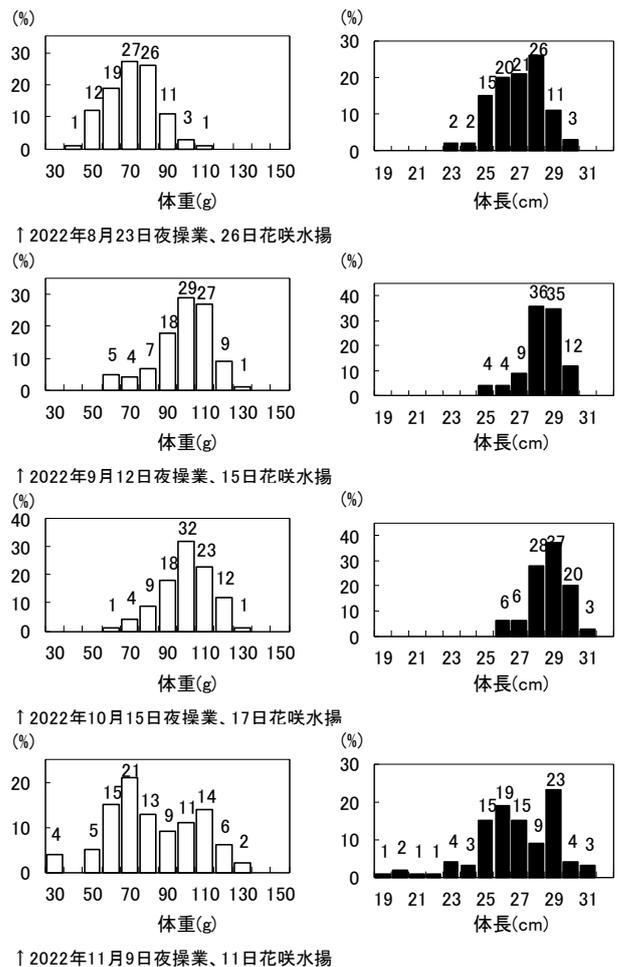


図 18. 2022 年サンマ体重組成と体長組成

12 月上旬になっても時化が多く、操業を切り上げる船が多くなった。公海の花咲港東南東沖 280 海里付近と霧多布南沖 10 海里～襟裳岬東北東沖 30 海里付近で漁場が出来たものの、漁獲量は極めて少なかった。その後数隻が残ったものの、12 月 13 日には今期の操業を終えた。

水産研究・教育機構が 6～7 月に行ったトロール調査結果によると、2022 年は 2021 年よりもサンマの分

布量が多かった。そのため、2022年は2021年よりも来遊量が多くなる期待があったが、1970年以降、最低の水揚量となった。トロール調査結果では、1歳魚の体長が前年よりも1cmほど短く、また太り具合も悪かった。漁期中の漁獲物は、この調査結果を反映し、1歳魚の体長が28~29cmと前年よりも短かった。漁期中公海で漁獲したサンマの太り具合は、前年よりも痩せており、体重140gを超えるサンマは極めて少なかった。

前年は日本近海に漁場が形成されなかったが、2022年は少ないながらも日本近海に魚群が来遊し、オホーツク海の羅臼沿岸と道東沿岸に漁場が形成された。例年のオホーツク海の漁獲物同様、漁獲物は0歳魚が主体であったが、1歳魚の中には体重150gを超える個体も出現し、太った個体が混じった。

(水産情報部 渡邊一功)

(3)カツオ・ビンナガ

1) カツオ

近海竿釣り船は例年どおり2月上旬から出漁し、和歌山県はるか南方沖～小笠原諸島周辺で漁場を探索したが、沖合で群れが薄く、4月まで奄美・沖縄周辺海域が主漁場となった(図19)。このため、鹿児島港に水揚げが集中し、1~4月の房州勝浦港(以下、勝浦港)への水揚量は120.5トンで極端に少なく(前年比5%)過去最低水準となった。魚体はカツオ特大・大が主体だった。5月から竿釣り漁場は遠州灘沖～房総沖へ移動し(図19)、カツオ中・大主体に漁獲し、まき網も5月から同海域で例年並みの漁獲があり、勝浦港へ水揚げが集中した。例年より魚体が大きい、脂の乗りが良く、小売店で価格が手頃であったため、消費者に好まれた。6~8月は、148~150°Eを北上する黒潮続流周辺が主漁場となり(図19)、勝浦港と気仙沼港に水揚げされた。9月以降は漁場が北上し、東北はるか沖150°E以東が主漁場となったため、漁場が遠く水揚げ回数は例年より少なかった。秋に東北沖に北上するとされる群れは、回遊経路である小笠原諸島周辺で春に群れが少なく、東北沖は全体的に来遊量が少なかったとみられる。また、漁場が遠く水揚げ回数が少なかったことで、夏以降の水揚げ主要港となる気仙沼港への水揚げが激減したとみられる。一方、鹿児島港では年間を通

して安定して水揚げが続いた。

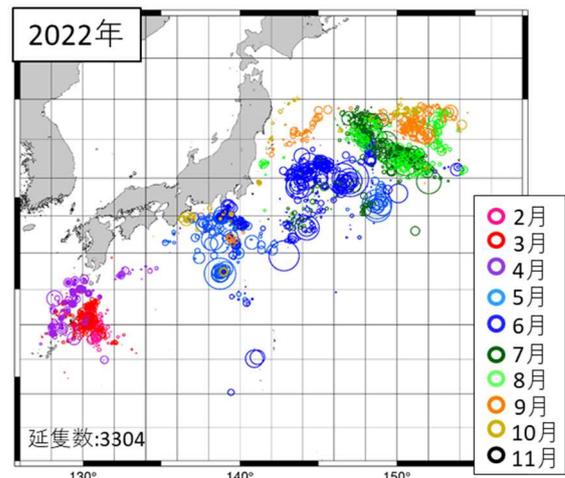


図19. 2022年6月の近海竿釣り船の漁場(情報収集海域全体)

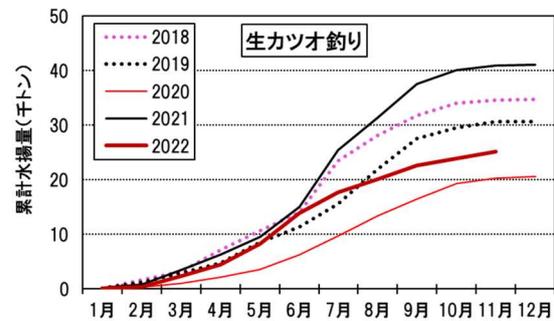


図20. 2018~2022年の全国主要港における生鮮カツオ(釣)の月別累計水揚量の推移

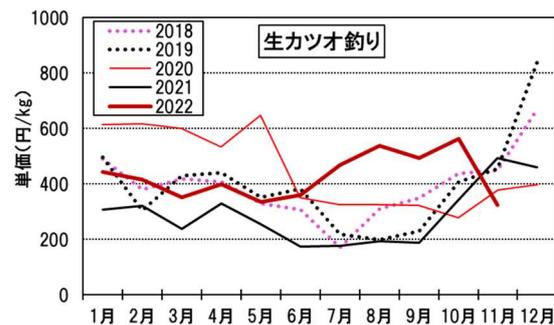


図21. 2018~2022年の全国主要港における生鮮カツオ(釣)の月別単価の推移

本年の竿釣りによる生鮮カツオの全国水揚量は2万5千トンで、前年(4万1千トン)を大幅に下回った(前年比61%)が、不漁だった2020年を上回った(図20)。夏以降の常磐～東北沖は不漁だったが、鹿児島港への水揚げが下支えとなった。まき網による生鮮カツオの全国水揚量は4.6千トンと

伸び悩み、前年(2万1千トン)を大幅に下回り、過去5年を下回った(図22)。価格は、竿釣りは前年より高値で推移し、7~10月は過去5年で最も高値の470~563円/kgだった(図21)。まき網は7~8月にキロ単価は400円以上の高値だった(図23)。

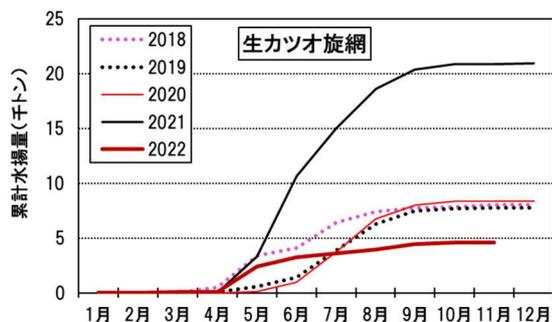


図 22. 2018~2022 年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別累計水揚量の推移

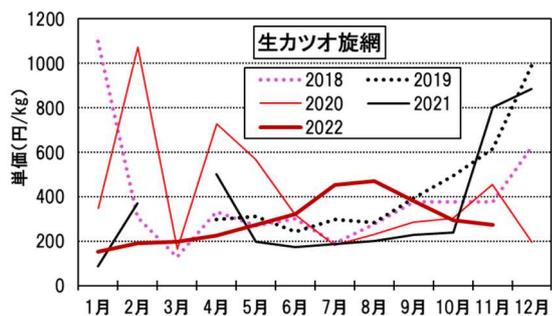


図 23. 2018~2022 年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別単価の推移

2) ビンナガ

竿釣り漁業は、前年より早い4月に熊野灘沿岸の黒潮系暖水が波及したとみられる海域で、大型魚主体に始まった。5月は黒潮が伊豆諸島から房総の比較的沿岸に寄り、その黒潮外側にあたる伊豆諸島東方海域で中型魚主体となり、1日1隻当り漁獲量は増加した。その後ビンナガ漁場は長く続かず、6月に入ってすぐにカツオ主体に切り替わり、本年の竿釣りによるビンナガの漁獲は例年より早く終了した。

全国主要港における水揚量は1万2千トンで、前年比59%、好漁だった2020年比32%、過去5年平均比47%にとどまった(図24)。生鮮ビンナガの全国平均価格は、3月以降400円/kg以上の高値で推移した(図25)。

(水産情報部 水野紫津葉)

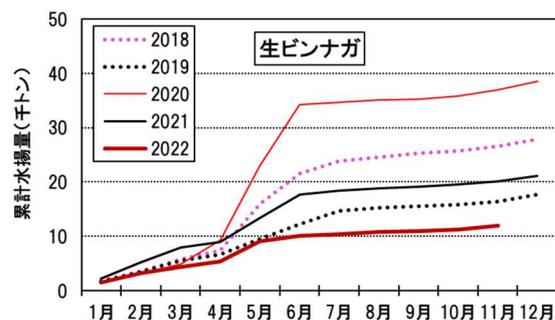


図 24. 2018~2022 年の全国主要港における生鮮ビンナガの月別累計水揚量の推移

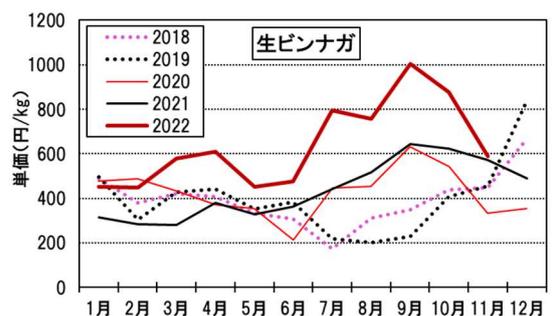


図 25. 2018~2022 年の全国主要港における生鮮ビンナガの月別単価の推移

(4)スルメイカ・アカイカ

1)生鮮スルメイカ

本年の全国主要港における生鮮スルメイカの水揚量は11月末現在で昨年並みの1.5万トンで、2018~2021年の平均(2.3万トン)の6割であった(図26)。

本年の月別単価は9月以降高騰し、11月には過去最高の1100円/kgを超えた(図27)。この原因として、いか類加工原料のひっ迫が考えられる(次項アカイカを参照)。

北日本周辺 of 春季以降の海面水温は近年(2011~2020年平均)より高めで推移した。対馬暖流の流路が前年は日本海沿岸よりであったが、本年の流路は山陰を離岸して大和堆付近を通過した。このため、北陸の水揚量は前年より増加した。一方、黒潮続流が前年より北上したため、三陸~道東沖では海洋熱波が顕著で、いか釣りには不適当な環境となり、水揚量が低調であった。また、八戸沖のまき網によるスルメイカ漁獲も不振であった。しかし、海面水温の影響を受けにくい底曳網(釧路、三陸)は比較的堅調であった。根室海峡の羅臼港の水揚量は年変動が大きく(100ト

ン～3.4 万トン/年)、本年は約 200 トンと不振であった。

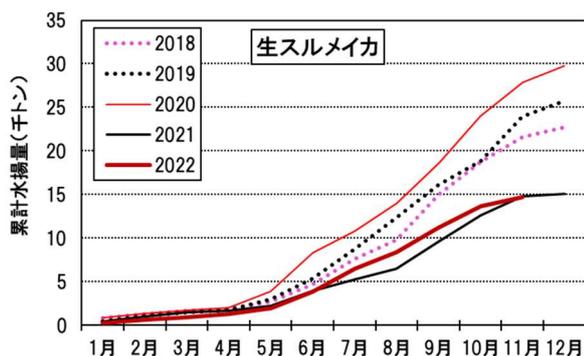


図 26. 2018～2022 年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別累計水揚量の推移

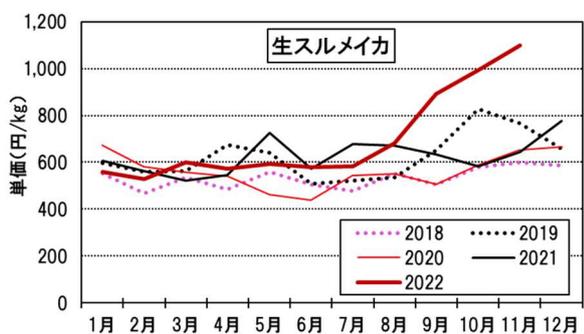


図 27. 2018～2022 年の全国主要港における生鮮スルメイカの 月別単価の推移

2) 冷凍スルメイカ

本年の全国主要港における水揚量は 11 月末現在で 3.9 千トンであり、2018～2021 年の平均(8.5 千トン)から半減し、前年(6.4 千トン)を 4 割下回った(図 28)。

冷凍スルメイカは、中型いか釣り船が 6 月～翌年 2 月に主に日本海で漁獲し船上で凍結したものである。近年のスルメイカの不漁を受け、前年から夏季にアカイカ漁に出漁する船が増加したが、今年にはアカイカ夏漁が不振で、2 次航海から全船が日本海のスルメイカ漁に切り替えた。しかし、能登半島沖のいか釣り漁場内にクロマグロや小型鯨類が多く出現し、集まったスルメイカ群が散るほか、漁具の破損等の被害もあり、操業に支障を生じた。また、7 月以降も能登半島以北の日本海北部には群がほとんど来遊しなかった。さらに、前年 7～9 月に好漁が続いた大和堆北沖のロシア水域内での操業ができなかった。これらにより、12 月上旬現在も引き続き大和堆～隠岐諸島北で低調なも

のの操業が継続している。

冷凍スルメイカの月別単価(図 29)は、8 月以降高騰し 1,000 円/kg を超え、11 月には過去最高だった 2019 年 11～12 月並み(1,200 円/kg)となった。近年輸入が急増した中国産スルメイカも、今期の漁獲が不振で輸入が増える余地がないことから、相場を押し上げた。

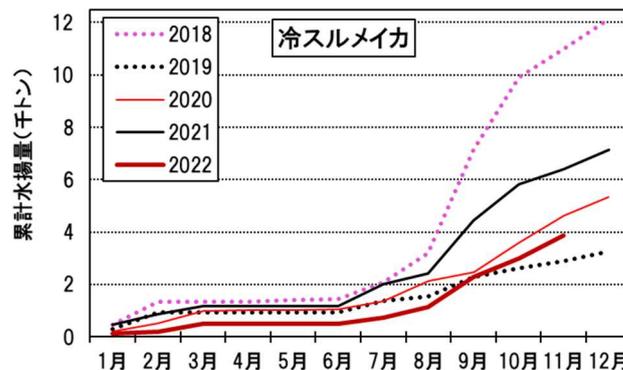


図 28. 2018～2022 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別累計水揚量の推移

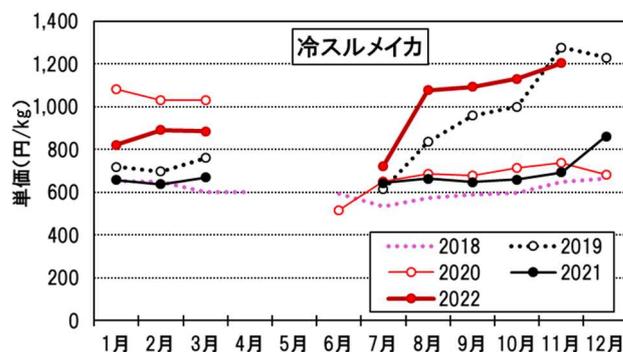


図 29. 2018～2022 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別単価の推移

3) スルメイカ(生鮮・冷凍)全体の動向

生鮮・冷凍を含めたスルメイカの今期(1～11 月)の水揚量は、1.9 万トンであり、過去最低だった前年同期を 1 割下回った(図 30)。

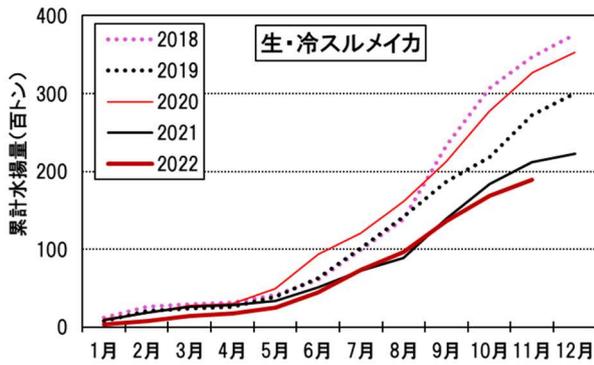


図 30. 2018～2022 年のスルメイカ水揚量の推移
(水産情報部 緑川 聡)

3) アカイカ

本年の冷凍アカイカの水揚は 11 月末で終了し、1～11 月の累計水揚量は 2,832 トンと、前年同期(3,646 トン)の 78%に減少した(図 31)。冷凍アカイカの水揚港は八戸主体であったが、加えて函館にも 346 トンがあった。平均単価は前年末には 469 円/kg であったが、本年は総水揚量の減少により単価は高騰し 9 月には 1300 円に達した(図 32)。その後やや低下して年平均単価 970 円/kg となった。

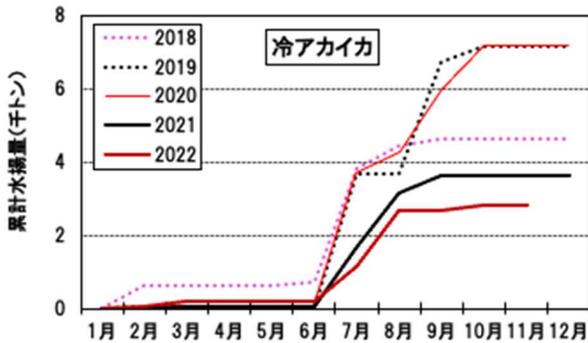


図 31. 冷凍アカイカの 2018～2022 年の累計水揚量(2022 年は 11 月まで)

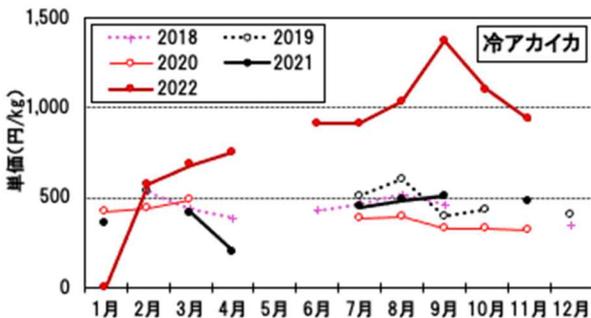


図 32. 冷凍アカイカの 2018～2022 年の月別単価の推移

本年 10 月末までの年別の水揚量と平均単価との関係から計算される総水揚げ金額は 2020 年とほぼ同様の水準で、25 億円程度と推測された。これは過去 5 年で最も総水揚げ金額が高かった 2019 年(30 億円超)に次ぐ高水準であった(図 39)。

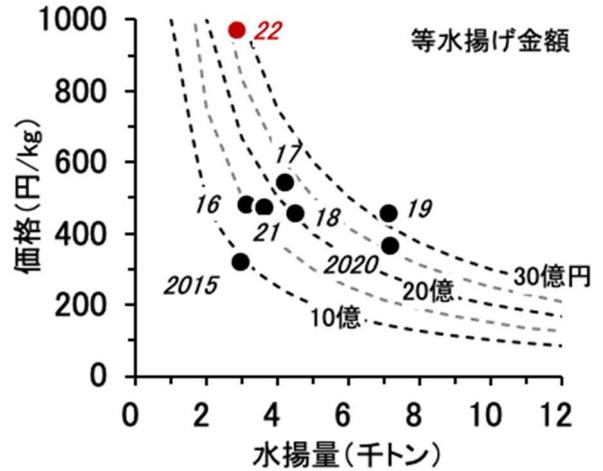


図 33. アカイカの 2015～2022 年の年別水揚量と価格(円/kg)の関係 破線は等水揚げ曲線(2022 年は 10 月末まで)

北太平洋の西経海域へ 5～8 月(夏漁)で操業する中型いか釣り漁船の出漁隻数は、2011 年の東日本大震災以降に大幅に減少したが(図 34)、近年はスルメイカが不漁のため出漁隻数が増加してきた。しかし、本年は廃船などで出漁隻数が前年よりも 3 隻減り、大型いか釣り船と用船調査船を含めて 25 隻となった(図 34)。また、前々年は好漁のため 2 航海する船も多かったが、本年はスルメイカの価格が良いことから、全ての中型いか釣り船は 7 月下旬に 1 航海で切上げて日本海のスルメイカ漁に向かった。そのため、本年のアカイカ総水揚量は前年よりも更に減少した。

2019 年までは太平洋沖合の西経海域で操業するいか釣り船の多くは日本漁船であったが、前年から中国船が出漁を始めた。本年は日本船よりも早く 4 月下旬に西経海域で操業を開始し、AIS で把握できる中国いか釣り船は前年の 26 隻前後から 48 隻に増加した。

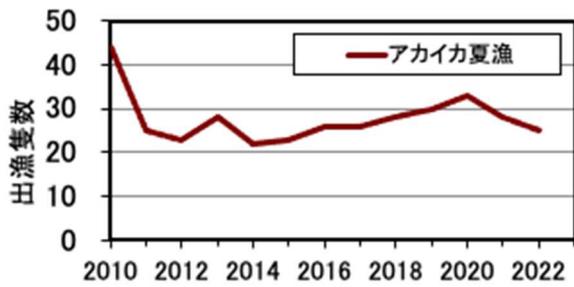


図 34. 北太平洋沖合におけるアカイカ夏漁(5~8月)の出漁隻数の推移(いか釣り調査用船1隻、大型いか釣り船1隻を含む)

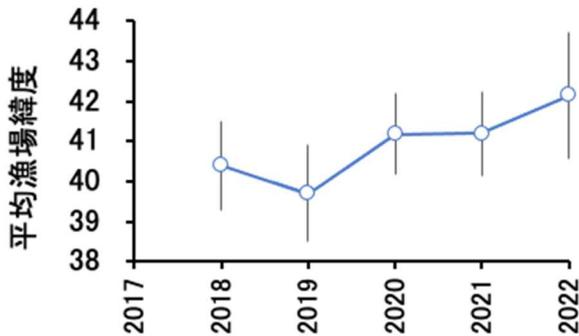


図 35. 北太平洋沖合におけるアカイカ夏漁(5~7月)の中型いか釣り船の漁場緯度の平均値(縦棒は標準偏差)

アカイカ夏漁の資源状態を表す1日当たりの漁獲量(CPUE: 胴肉ケース数/日/隻)は、直近の5年間で見ると2020年にピークとなり、その後本年まで徐々に減少する傾向が見られた。また、漁場を形成する緯度は2019年以降、より北方に形成されていることが示され(図35)、近年、北太平洋で見られる顕著な海洋熱波の影響によるものとみられる。

本年はアメリカオオアカイカやアルゼンチンマツイカなど世界の主要なイカ資源は良好な状態だった。しかし、近年、加工原料として日本での需要が高まったカナダマツイカは前年まで豊漁であったが、本年は不漁となった。スルメイカの記録的な不漁が続く国内のいか類原料が更にひっ迫し、さらに国産アカイカを中国産の輸入アカイカとの差別化を図るため生産者側では「ムラサキイカ」と名称変更をするなど、国産アカイカの需要を喚起する動きも加わって価格が上昇したと考えられる。

(海洋事業部 酒井光夫)

令和4年 浜だより JAFICが見た今年の漁港とさかなたち

花咲



令和4年7月13日
タラの水揚げ1,047箱。1箱7~8(小サイズ)入から2入(大サイズ)まで6段階ありますが、この日は4~5入/箱が最も高値(259~238円/kg)で取引されています。

花咲



令和4年8月4日
北洋サケ・マス流し網漁業禁止に伴う代替漁業としておこなわれているマイワシ棒受網の水揚げです。漁場は花咲沖、サイズは16cm主体で15~17cm、価格はキロ単価70~50円

花咲



令和4年8月18日
8月10日に出港した棒受網19トン船がサンマを初水揚げです。36ケースで約275kg。価格は大きなサイズが54,000円/kg。

釧路



令和4年7月14日
流し網船によるサンマの初水揚げです。24尾(2.5kg)でキロ67,000円/kgと史上最高値です。

大船渡



令和4年10月13日
今年サンマは少なかったですが、この日は大物が水揚げ。定置網にクロマグロ100～170kg級が63本。市場は活気づいています。

気仙沼



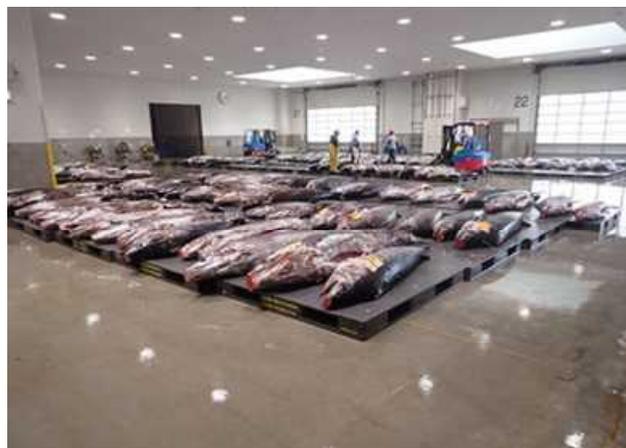
令和4年4月18日
地元の定置網にキングサーモン(8.5kgと6.5kg)が入りました。

気仙沼



令和4年6月1日
待望のカツオ一本釣船が3隻入港148トン。
カツオは3～4.5キロの、大、中主体です。漁場は房総半島の東沖。

気仙沼



令和4年7月4日
メカジキの大量水揚げです。突き棒、大目流し、近海延縄船を合わせて331本。カツオ、サンマとともに、こちらも気仙沼のさかなです。

<p>石巻</p>		<p>令和4年8月18日 暖水性のメダイの水揚げが続きます。以前は東北にいなかったさかなですが、加工して惣菜魚となっています。</p>
<p>石巻</p>		<p>令和4年9月26日 夏以降、底曳網でtachiuoの水揚げが続きました。定置網にも入網しています。 ブランド化もされて、一般の沿岸物tachiuoはキロ1,000円台ですが、船上活メtachiuoはキロ3,000～2,200円です。</p>
<p>石巻</p>		<p>令和4年11月28日 小型定置網で漁獲された暖水性のイシダイです。</p>
<p>石巻</p>		<p>令和4年12月14日 冷水性のケガニと暖水性のガザミが活魚で並ぶ風景も珍しくありません。ガザミは震災後に水揚量が全国一となり、活魚流通しています。</p>

境港



令和4年3月10日
境港では、水揚量が1,000トンを超えると市役所正面に大漁旗が掲揚されます。
今年は合計20回掲揚され、令和になって最多となりました。

境港



令和4年4月22日
この日は、前日までのアジの大漁がサバに変わっていました。
まき網運搬船の船上で、サンプルを提示しています。仲買人はこの様子を元に、必要な量と値段のフダを入れます。

境港



令和4年6月28日
天然クロマグロ水揚量日本一の境港です。
漁期合計1,000トンを超え、目廻、金額とも昨年を上回りました。

境港



令和4年10月20日
大中型まき網の漁獲物の中に珍客ハコフグ。
“さかなクン”の帽子です。

境港



令和4年11月7日
松葉ガニの初競り式です。
「鳥取県は蟹取県になりました」

松浦



令和4年4月29日
大中型まき網のアジやサバに交じって「ダイコクサギフエ」が入っていました。
乗組員や市場関係者も初めて見たということです。

松浦



令和4年8月25日
運搬船から水揚げされた漁獲物は、専用フォークリフトで運ばれ、高度衛生管理型市場内ではコンベアに乗ります。

松浦



令和4年11月22日
大中型まき網船で漁獲された大型のマサバです。

(水産情報部 細窪 迅)